

「ドロ刑」プロからのメッセージ

## 『現場刑事の掟』

小川泰平 著

文庫ぎんが堂  
840円

著者は二年ほど前に退職するまで約三〇年間、現場第一線の刑事として、捜査はもちろんのこと被疑者の取調べも数多く担当してきた。

その長い刑事生活で、殺人、傷害、交通違反の取締り、留置場など、あらゆる犯罪の現場にいたが、主に刑事部捜査三課に所属し、窃盗事件を専門に扱う刑事として職務に従事してきたという。

本書は、その経験をもとに、刑事、警察官、犯罪を巡る加害者、被害者の実像が描かれ

ており、そこに事件解決への道標もプラスされた警察ノンフィクションである。

取り上げられているのは、誰もが知っている大事件ではなく、日々常に身近で発生している犯罪。

そこでの刑事たちの姿は、映画やテレビドラマのように決して格好良くはないが、だからこそ地に足の着いた説得力があり、これからの若い警察官に向けての指南書にもなっているといえるだろう。

「事件現場」「捜査」「逮捕」

おがわ・たいへい：一九六一年生まれ。一九八〇年神奈川県警察官を拝命。交番勤務、関東管区機動隊などを経て、所轄の盗犯係刑事を皮切りに警察本部刑事部機動捜査隊、捜査三課、国際捜査課、警察庁刑事局刑事企画課などの職務に従事。二〇〇九年神奈川県麻生警察勤務を最後に退職。

「取調べ」と四章に分けられ進められているが、例えば、「事件現場」での「捜査の基本はすべて「ドロ刑」にあり」の項。

殺人事件などを扱う捜査一課のように花形部署ではないが、警察内部では「泥棒刑事に始まり泥棒刑事で終わる」といわれ、捜査の基本は捜査三課で扱う泥棒捜査にあるという。

一〇〇パーセントの再犯率といわれる常習犯が、いつ刑務所から出所するかなどの緻密な情報収集。泥棒で生計を

立てている「職業泥棒」の一件の犯罪に付いている余罪は最低一〇〇件に及ぶといい、それをいかに引き出すかの、時間をかけた取調べのテクニク。

「ドロ刑」のプロフェッショナルと呼ばれた著者は、一件の犯罪から五一八件の余罪を引き出している。

裏を返せば、それだけ日常的に被害が起きているということであり、結果的に「ドロ刑」は知力を尽くし、日夜走り回っていると力説する。

その他、引いては押すの暴力団とのやりとり、丁寧な対応だが、例え相手が有力者であつても一歩も引かない、交通違反取締りでの毅然とした態度など……。

筋を通した刑事人生が行間にもじみ出た、おすすめの一冊である。